史林

第十卷 第貳號

大正十四年四月一日發行

（通卷第三十八號）

研究

ポリビオスの史風（上）

文學士 原隨園

一、ポリビオス及びその時代

ローマの勢力がイタリヤ半島を越へて地中海に延び、覇權をカルタゴと爭つたのは、紀元前三世紀の半ばであつた。カルタゴの志士ハンニバルは、祖國の復活のために戰つたけれども、遂に大スキピオのためにザマに敗走した。それは紀元前二〇二年の事であつた。吾がポリビオスは、此の前後に浮世の光を見た。（註一）そして八十二歳の高齢を以て、落馬が原因となつて此の世を去つた。（註二）彼はアルカヂヤのメガロポーリスの人である。父をリコルタスと呼び、ギリシヤの獨立のために最

後の努力をなした志士の一人であつた。(註三)

紀元前一六八年、それは、ローマの勢力に對するマケドニヤの最後の奮鬪が、ピドナに於て無慙にも崩れた年である。此の戰の結果、マケドニヤの志士一千人はローマに伴はれた。彼ポリビオスは是等の俘囚の一人であつた。

此の頃ローマへは、急にギリシヤ風が流れ込んだ。大カトーの如きは、ローマの國粹的氣節の廢頽しゆくを慷慨した。ギリシヤ風の文化の流入を極力阻止せんとした。

「ローマ人が、ギリシヤ文學に十分心醉した時、その時彼等はその世界的帝國を失うだろう」

と子供を誡めて言つた由が、プルタークのカトー傳に見えて居る。かくの如く、一部の國粹論者はギリシヤ文化の優越し來るに向つて反抗を試みたが、それにも拘らず、大勢はヘレニズム謳歌に傾いたのである。プルタークは、カトーの此の言葉

を評して曰ふ。

「然し時代は、此の忌はしき言葉の虛しい事を示した何故ならば、ローマがギリシヤ學に最も通じ、又凡ての學問の方法に、注目するようになつた時が、ローマの最も偉大なる調子に在つた時であるから」

と。(註四)ポリビオスは、かゝる雰圍氣をもつローマに入つたのである。

ローマにおけるポリビオスは、初めはピドナの勇將エーミリウス・パウルスの家に置かれて居たが、後には名家スキピオ家に移つた。そしてローマの貴族の生活に親しむ事が出來た。彼がスキピオ家に移つたのは、ローマにおけるヘレニズム崇拜の結果であつたといつてもよい。パウルスの子にして、スキピオ家に養はれた小スキピオは、當時まだ十八歳の青年であつたが、彼はやはりギリシヤ文化に憧れた青年の一人であつた。ポリビオスは、小スキピオの憧憬の的となり、その熱情に

動かされてスキピオ家に移り住み、彼と濃やかな友情を結ぶ事になつたのである。(註五)かくてポリビオスは就中政治について論じ、又一般ギリシャ的教養を、青年スキピオに與ふるに到つた。(註六)此の事は、當時ローマの青年が如何にヘレニズム文化に憧れて居たかを物語ると共に、一方に於てはポリビオスが、彌々ローマの貴族生活に親しむの機緣を得た事を示して居る。かくて彼はローマの政治組織を見るにつけ、祖國の悲運を思ふにつけて、やがてローマが天下を一統した由來を記述し、ギリシャ人の覺醒を促さんと企つるに到つたのである。(註七)だからギリシャ人が國情を異にするために記事に不信を措く樣な事のないように注意を促して居る。然し同時に彼はローマ人の讀者をも豫想して、ギリシャ人が記事を信ぜぬ事があらうとも、ローマ人の讀者は不信と輕蔑とを示すまいと言ふて居る。(註八)彼は、それ程ローマ人の心持に同感し得るようになり、それ程ローマ人の生活に浸る事が出來えたのであつた。

彼の書いた歷史は、總べて四十卷の大册であつたがその中、唯初めの五卷の他は完備して居ない。僅に他の書物の中に引用文として殘り、斷片として存するに過ぎずして、學者、殊にビザンツの蒐集家の努力によつて集成されて居るのである。

歷史家としての彼の名聲は、ツキヂデス程高くはないけれども、(註九)決してツキヂデスに比肩し得ぬものではなからうと思ふ。シセロも、卓越せる良き歷史家と評して居る。(註一〇)況してヘロドトスや、リヴイウスに比較して劣るとは思はれない。今、彼の史風に就いて考究を試るのも、歷史家としての彼をして、在るべき地位に於いて理解したいとの意味に他ならぬのである

註一　彼の出生の年代は明かではない。

210--206 B.C. Jebb R. C.: Companion to Greek Studies.

209. 210 B.C. 以前 Susemihl, Geschichte der Griechischen Literatur in der Alexandrinerzeit. B. II. S. 82. 註5. 203 B.C. Shuckburgh, History of Polybius I. Introduction P. XV. 200 od. 199 B.C. Rosenberg, Einleitung u. Quellenkunde zur römischen Geschichte. S. 188. 198 B.C. Bury, Ancient Greek Historians P. 191. 198 B.C. Sholwell, Introduction to the History of History P. 191.

かくの如く諸説があるが、論據は左の三つに出發する。

a. 前一八一年、彼が父やアラーツスと共に、アカイヤ同盟の使者として、埃及に派遣されたが、その時にはまだ公職に就き得る丁年に達して居なかつたといふ彼自身の記事、(Polybius; 25, 7). b. 彼が八十二歳で逝去した事、(Lucian; Macrobii 22). c. 一三二年に終つた、ヌマンチヤの戰の頃には、尙ほ彼が生存して居た事（Cicero; Ad Familiares 5, 12）(b と c は Rosenberg, op. cit. S. 191 に基ゐ)

それ故に最も早く推定するも、b. と c. とから二一四年を超ゆる事は出來ない。a. の「丁年」を何歳と推定するかに依つて問題は決定されるのであるが、之を三十歳とする通説は妥當であると思ふ。それは二九卷九節に見ゆる「一般會議に召集されし人々は三十歳以上」と限定された事が參照されるからである。然しその丁年に達して居なかつたと記さるゝ故に又根據が漠然となるを避け難い。斯に問題は著作の內容批判に俟たなければならなくなる。

二〇〇年以後と推定する根據は、一つにはポリビオスが一六九年にヒッパルコスに任ぜられたのは、家柄から考へて彼が丁年になると直ちに補職されたのであらうといふ事、換言すれば一六九年に丁年に達したであらうと推定する。又第二卷二一節に於て、既にローマの衰退する遠因を認めて居るが、それはグラックス兄弟の改革を見たからであると推定する。前者の推定は餘程薄弱な理論であり、又後者も後に說く樣に彼は一國の盛衰は自然の理法であるかの如く考へて居るのであるから、ローマ衰退の因を認めたといふ事は、必ずしもグラックス兄弟の改革を見たる後の記述とみる必要はあるまい。然しプルタークのフィロポエメンの傳によれば、ポリビオスはフィロポエメンの遺骨を持つて市に歸つて居る。それは、一八三年か一八二年の事であつて、使者として埃及に赴く少し以前の事である。此の遺骨を捧げたりする事は通常青年の任とされて居る。チモレオンの遺骸がシラクサ市民の選んだ青年達によつて運ばれたと記したるプルタークのチモレオン傳が參照されるから、此の時ポリビオスが十七八の青年であつたとすれば、二〇〇年以後に生れたとする說は此の點で支持されるように見える。

けれどもポリビオスの二一卷二二卷に詳述されたる一九一年から始まるアンヂオコスとの戰の記載は、極めて詳細であつて、直接之に關係して親しく體驗して居なければ書けないといふ說(Susemihl, op. Cit. II. S. 82. 註5)は最も動かし難い論

據をもつて居ると思ふ。此の點から、二〇〇年以後とする說はどうも支持し難いようである。

一方に於て、二一四年に生れたとすれば、使者に選ばれた一八一年には三三歲となる筈である。丁年を三十歲と假定するも、そして多分それ以上ではありえまいから、最上限と雖も二一〇年まで繰り下ぐるが妥當であらう。

それ故に目下の自分としては二一〇年說を信じたいと思ふ。

註二 前註5參照 **註三** Plutarch (Langhorne譯) Philopoemen. Pol. bius (Haak u. Kraz 譯). 24, 9. 25, 7. etc. 獨譯は Bekker 版の本文に據り Shuckburgh の英譯は Hulsch 版に據れるが故に章節は第二〇卷以後に於て多大の異同がある。今は盡く獨譯の順序に從ふ。**註四**、Plut. Cato **註五** Pol. 32, 9-10. **註六** Cicero, (Young 譯) On the Commonwealth. esp. I, 21. **註七** ibid. 6, 50; 3, 3. **註八** ibid. 32, 8. Shotwell, op. cit. P. 192.**註九** Wahrmund, Die Geschichtsschreibung der Griechen. S. 85. **註一〇** Cicero, (Edmund 譯) On the Office. III, 32.

二、歷史編述の動機　その一

ローマが都市國家から勃興して、世界統治へと向ふ變動の時は、確に、ローマ史上における一つの劃時期である。ポリビオスは、此の時代に遭遇し、親しくローマ人の生活を體驗した。別して、ローマの有力者の家に寄寓して、彼等の生活にも深い理解を持つたのである。此の發展の時代におけるローマ人の意氣は、正に衝天の勢があつた。亡國の悲運を目のあたり視たポリビオスは、祖國の運命にひきよそへて、ローマ人の此の盛なる意氣に感激したのである。ローマ人が、世界統治を成就したその原因が、果して何處に在るかといふ事は吾も人も共に知らんと希ふ所の、興味ある題目と考へざるをえなかつた。

「如何にして、又如何なる政治的手腕によつて、ローマ人は、人の住む限りの殆んど全部の世界を、僅々五十三年にも足らぬ年月の間に征服を遂げ、單獨の支配の下に、齎したか。是をしも知ろうと試みないようなそんな無關心な、又そんな冷淡な、人は唯の一人たりともありえませうか」(註一)

と彼は言ふて居る。卽ち僅か半世紀の間に、「同時代の者は只管驚嘆し、後代の者は決して是以上に

出づる能はざるべき」程の(註二)又「未だ曾て起らざりし」程の(註三)大帝國を支配するに到つた事は、必ず由つて來る所がなければならない。それは「如何なる計畫の下に、如何なる力と手段とを以て」なされたか。(註四)又「如何なる政治的手腕を以て」それが實現さるゝに到つたか。此の點が彼の最も感興を惹いた點であつた。彼が世界史の編述を企てた動機の一つは、かゝるローマの世界統治の原因についての考察であつた。

註一　Pol. 1, 1.　註二　ibid 1, 2.　註三　ibid 1, 1. etc.
註四　ibid 1, 3.

三、歷史編述の動機　その二

ポリビオスの見る所の歷史は、單に過去の事實を該博に知るといふ事を目的とするのではない。彼は歷史を以て、雜多なる事件を記憶する所の、所謂物識りになる學だと考へたのではない。歷史は唯知るためのものではなく、寧ろ理解すべきものだと思惟した。彼の見解によれば、人間は推理、理解の能力を持つて居るから、將來を豫見し、類似の出來事から推論する事が出來る。(註一)歷史は、是に因て盛衰興亡の迹を觀じ、その得失を會得すべきものであり又理解しうるものだといふのである。

「理解するといふ事と、單に聞くといふ事とは、自分の見る所では、截然と區別される。同樣に、吾々の言ふ所の歷史と、唯特殊な材料を取扱ふだけの記錄との間には、又區別が存する」(註二)

と。彼は歷史をかく解釋する。歷史を理解し、その得失に鑑みて、時には一身の行動を、時には國家の經營を指導しようとするのである。斯に彼がPragmatikos(註三)實用的と唱ふる歷史の立脚地がある。歷史を書く目的は、歷史研究の結果、讀者に何等かの利益を與へんとするに在り。(註四)又處世の指導たらしめんとするに在つた。例へば、ガ

リヤ人の行動を記して後の戒としようとした。即ち、

「かゝる運命の戯れを、後人の記憶に留め、是に因つて後世の人が、同一の事件を十分に知らずして、そのために、蠻人の突然な不慮の攻撃に對して、意氣を沮喪する事のないようにする。之が歴史家の義務だと思ふ」(註五)

と見えて居る。アテネの疫癘を記述して、後世の參考にせんとした、ツキヂデスの面影がある。(註六)かくの如くにして、熱心に過去の事を研究する事によつて、人世の經驗を豐富にする事は、人々にとつては極めて適當な娯樂ともなるものだとさへ考へた。(註七)

歴史は、右の如く處世の方針について、政治の運用について、適當な鑑戒となるものである。

「吾々の歴史が、現在及び將來に向つて齎らす効用は、主として此の點に存して居る」(註八)

而して彼によれば、歴史ほど、處世の羅針盤として役に立つものはなく、殊に政治教育に就いては、歴史は唯一の教科であると考へたのである。

「人にとつては、前代の出來事に就いて知るよりも、より適應はしい教科の方法はない」(註九)

とか、或は又、

「人々はいふ。歴史からの教訓は、國家の仕事に對する、最も正しき教育と訓錬との學校であり、他國の運命を回想する事は、幸運が變轉するのを堂々と堪え忍んでゆくために、最も有効な、且つ、唯一の教師である」(註一〇)

などといふて居る。又彼は曰ふ。

「歴史に若し實用的教科の要素が缺如するならば、歴史の殘餘の部分は、無價値なものであり、役に立たぬものである」(註一一)

と。彼の見解に從へば、政治教育は、飽くまでも「事實」に立脚しなければならないのであり、抽象的理想論から教訓を求むる事は出來ないのである。即ち歴史事實から利害得失を批判する事によ

つて、始めて將來の指針が求められる。されば、プラトンの理想國の如きは、ポリビオスにとつては單に一箇の偶像であつて、謂はゞ生命なき死物に過ぎない。從つてかくの如き理想論は、生命の血の漲つて居る人間にとつては、規範とすべきものではないとさへ考へて居た。(註一二)將來の龜鑑とすべきものは、それ故に、抽象的な理想論の中に求めて得らるべきではなく、それは必ずや、事實を記載した歷史の中に探求の歩を進めねばならぬとするのであつた。斯に彼は歷史編述の實用的意義を認めたのである。

思ふに彼は、亡國の悲運に際會した祖國の運命を、再び既倒に挽回せんとするの志から、その模範として、榮えゆくローマの實例を說かんといふような、實際的な動機も含まれて居たものと推察される。

註一　Pol. 6, 6.　註二　ibid. 3, 32.　註三　ibid. 9, 2.

註四　ibid. 9, 2.　註五　ibid 2, 35.　註六　Thucydides, 2, 48.　註七　Pol. 5, 75.　註八ibid. 3, 4.　註九　ibid. 1, 1.　註一〇　ibid. 1, 1.　註一一　ibid 12, 25g.　註一二　ibid 6, 47.

四、彼の計畫

彼の歷史は、ローマの世界統治の由來を探求しようといふ動機から書かれた。それ故に、此の問題の闡明に關係ある部分だけを取扱ふとしても、それは勢ひ、當時の諸國の記載にも及ばなければならない。

吾々は今歷史を書くに當つて、時代からいへば、第一四〇回のオリムピヤド（紀元前二二一〇―二一六年）以後に就いて、事件から言へば、ギリシヤに於ては、所謂同盟戰役から、……アジヤに於ては、シリヤに對する戰から……イタリヤとリビヤとに於ては、……所謂ハンニバル戰役から始める。」（註一）

といふて居る。但しローマの事件は、直にハンニ

バル戰役から書き始めては、勢ひ由來が明かにならないので、ローマの勢力がイタリヤ半島以外に擴張さるゝ所から執筆した。卽ち彼の言葉を藉りると、「チマイオスが擱筆した以來であつて、第一二九回オリムピヤード（紀元前二二六四―二二六〇年）に概當する」のである。（註二）

然し乍ら本來の目的は、ローマの隆盛に關する原因の說明にあるのであるから、此の根本問題に關係ある要點を摘出し、その他の點は、詳細に亙る事を避けたのである。（註三）

さて彼の尨大なる歷史は固より一朝にして完成さるべき筈のものではない。それ故に、一つには、後から若しくは隨時に改訂も施されたであらうといふ推定と、二つには、豫め幾部門かに分つて執筆さるゝ計畫であつたらうといふ、此の二つの推定が加へられるのである。

第一の推定は全く確實である。（註四）改訂を試みた部分と未だ改訂に及ばなかつた部分と前後撞着せる點もあり、その中には、實地踏査の結果修正した部分もある。（註五）又當初の目的では、ハンニバル戰役以後五十三年間の歷史を書く豫定であつたといふから　マケドニヤの敗北まで書かるべき筈である。（註六）然るに、豫定の部分以後の形勢をも包含する事に計畫を改め、實際は一四六年に到るまでの歷史を書いて居る。（註七）卽ちマケドニヤを始め全ギリシヤの覆沒について、又第二回ポエニ戰役以後第三回ポエニ戰役の結末まで書いて居る。されば吾々は第一の推定を確斷して好い。卽ちポリビオスは、その歷史を後から若しくは隨時に修正を加へて居り、又最初の豫定をさへも變更したのである。そして前後に矛盾を存する所から推せば、恐らく全部の改訂は組織的に行はれたのでもなく、又それが、完了せずして中斷されたものであらう。（註八）

第二の推定に就いては、ニッセンが七分説を立てゝ居る。(註九)それによると次の樣に區別する。

1、始め六卷は序説。
2、次の六卷は、ローマとカルタゴとの抗爭が、極度に達せる時代。
3、次の六卷は、アフリカの戰よりマケドニヤの沒落まで。
4、次の六卷は、ローマの覇業に就いて。
5、次の六卷は、ローマの社會組織の變動を。
6、次は特に四卷であつて、次の時代への推移を叙述する。
7、終り六卷は、地中海諸國が最後の反抗をローマに試みたるまで。

以上の七分説は、第六卷にローマの制度を、第十二卷には他の歴史家、殊にチマイオス及びエフォルスの著作に就いて批判し、第三十四卷には地理を論じて居るといふ點から、卽ち各大區分の終りにそれ〴〵特殊な記事を載せて居るといふ點から、一層力强く主張されて居る。又第四十卷に、附載してある梗概は益々此の説を有力にするものと考へられて居る。

實際四十卷といふ大册を、何等の目算なく筆のまに〳〵書き續けたとは思はれないし、殊に彼は、後にも言ふ如く、世界史を全體として把握しようとしたのであるから、何等かの標準があつたらしいといふ推定は可能である。然し乍ら僅にビザンツの學者等の努力にて輯集されたる斷片と、及び最初の五卷とのみからは、別に確證を見出しえないのであるから、吾々はかくの如く豫定の區分について積極的に主張する事は困難である。著述の分量は豫定と實際とは增減を免れぬのが常である。況して、豫定の變更と、內容に修正の加へられた事とが、確實に斷定し得らるゝに於ては、四十卷といふ數が始めからの豫定であつたかさへも不明である。目下の吾々は、何等かの豫定された

區分があつたであらうと推論する以上には、進んで斷定を下し得ないのである。

註一 Pol. 1, 3. 註二 ibid 1, 5. 註三 ibid 1, 13. 註四 Susemihl, op. cit. S. 108. 及註 104. 註五 Pol. 10, 11; Bury. op. cit. pp. 193-及註. 註六 Pol. 1, 1-5; 3, 1-3. 註七 ibid 3, 4-6. 註八 Bury, op. cit. P193. 註九 ibid, pp. 195 Susemihl, op. cit. S. 195. 及註

支那都邑の城郭と其の起原

文學士 那波利貞

一

城郭の築造は古來支那に於ての偉大にして顯著なる建築工事の一種にして之を分類すれば長城の築造と都邑周圍の城壁の築造とに二大別することが出來る。此の中の前者なる長城の築造に就いては之が世界的に著名なる事實なるが爲に、之を研究する學者も相當に存し、譬へば清の顧炎武が『山東考古錄』に於て其の遺蹟を研究するが如く、支那日本の學者は勿論、西洋の支那學者も大に之に留意して William Edgar Geil 氏の The Great Wall of China. (1909. London.) の如く長城の築造を軍事的政治的將た文化的に解釋せむと試むる學者さへ出て來て居る。

然るに其の後者なる都邑周圍の城壁築造に就いては其の事實が古代よりあまりに普遍的なるが爲か、將た知見に慣れて特別の注意を致さざるが爲か、之を深く研究したる者が稀なるかの樣に見受